

環境と森林



1996 年(平成 8 年)
11 月号 (No.618)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

環境と森林	1
秩父宮妃殿下を偲ぶ会	3
追悼・春田俊郎先生を偲んで	3
海外の山・小西政継マナスルに消ゆ	4
支部だより	
秋田支部・東北ブロック集会他	5
宮崎支部・九州島発祥の山	6
山形支部・秋田駒・乳頭山縦走	7
越後支部・創立 50 周年記念山行	8
宮城支部・仙台が誇る「山の先達二人展」を終えて	9
報告	
K2 登山隊 1996 祝賀・報告会	10
講演会・環境と森林	10
三水会・現地集会	10
山の切手・世界七大陸最高峰	11
東西南北	
山の歌となった劇中歌『街の子』	12
俳句・三水会山研集会にて	13
俳句・八甲田山・岩木山	13
荒川三山から赤石岳の還走	13
テントと星空	14
小さな自然保護	14
図書紹介	15
図書室受入報告・住所変更	16
新入会員	17
会務報告	18
INFORMATION・ルーム日誌	19

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日 10~20時
水・金曜日 13~20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日 13~20時

はじめに

十月三日、JAC 科学委員会では、環境についてお話をした。これはその要約である。

一九世紀半ばから、近代文明は大発展を遂げた。農業土木技術、育種、化学肥料、除草剤、害虫駆除の農薬などの発達により、農業生産力は増大、かつ安定した。医薬の発展は流行病を抑制した。これらは、今世紀に入ってから人口の爆発的増加をもたらした。人類が希求してきた問題が改善されるとともに、期待または予想していなかった問題が生じ始めた。すなわち環境問題である。

最近流行の「地球環境にやさしい」

岩坪五郎

の表現には、疑義を感じる。地球誕生当初の気象は九〇パーセント以上を炭酸ガスが占めていたし、海水や降水は高濃度の塩酸溶液であった。

私たちが対処しなければならぬのは、人類が引き起こした、人類にとっての環境問題である。もし地球に心あれば、人類の出番はそろそろおしまいだな、と思っているかもしれない。

ここでは、人類の環境にとっての森林の機能、効果について述べる。

■森林の有機物生産能

森林は人類の環境を護る善玉とされている。これからのもっとも深刻

な問題はエネルギー問題である。化石燃料の消費に伴う炭酸ガスの増加は、温室効果により地球の温暖化をもたらす。森林はその炭酸ガスを酸素に変える、と期待されている。

森林の材積、蓄積量が増大しつつある若い森林は、炭酸ガスの炭素を使って光合成を行い、有機物である枝、幹、根などを造るわけだから、そのとおりである。しかし、森林の樹高は無限に高くなるわけにはいかず、せいぜい百年くらいで頭打ちになる。蓄積量も一定になる(図 1 参照)。つまり、人間が伐採しなくても、枯死する木とその跡地で成長する木で全体として蓄積量は一定になる。その状態になると、樹木が大気中の炭酸ガスを減少させるのは、落ち葉など植物遺体を作る分だけで、それは、土壌で分解され炭酸ガスとして大気に戻るから、土壌を含めた

森林生態系としての炭素収支はゼロとなる。森林をして能率よく炭酸ガスを固定させるためには、伐採してそれを燃やさず、森林を、つねに成長しつつある状態におくことである。

しかし、現実的にはその実行は、とくに発展途上国では難しい。野火、過放牧、雨期の土壌侵食などにより、土壌が疲弊するからである。

■大気中の炭酸ガスの収支

地球上の炭素の九九・九五パーセントは、石灰岩などの堆積岩になっている。その残りが炭素に換算して、海洋に三万五千、森林に約四千(土壌の有機物を含む。ただし諸説あり)、大気に六四〇ギガトン(二〇の九乗トン)存在している。

毎年、大気中に放出される炭素量は、ギガトンの単位で、化石燃料の消費とセメントの生産によって、五

・五、熱帯林の減少に伴って、一・六。吸収される量は、海水に二・〇、北方林の成長によって〇・五。大気中に残る量は三・三と計算されている。収支のあわない一・三は、炭酸ガスの増加や酸性雨に含まれる窒素の肥料効果による森林（落葉層を含む）の増大によるものではないかと推論されている。（IPCC、一九九五）

熱帯林は地球全体の生物体有機物量の五五パーセントほどを占めていて、その農耕地などへの変換は、炭酸ガス収支に大きい影響をもっている。

■酸性雨

北方林の肥大は、炭酸ガスの増加による光合成作用の促進と、酸性雨・酸性降下物に含まれる NO_x の施肥効果によると最近のみなされている。欧米であれだけ騒がれた「酸性雨による森林衰退」の図式は、すっかり書き直されてしまった。関東平野での背の高いスギの先枯れについて、酸性降下物によるとは考えがたいと、一九九二年に報告したわが国の森林総合研究所は、時流におもねない科学者の姿勢として、賞賛に値する。

日本での銅鉾山の場合のように、高濃度亜硫酸ガスによる森林衰退が、東欧やロシア西部の一面でおこったのは事実である。その写真が、全州の森林衰退の見本として、喧伝さ

れた、という。

■森林の水源涵養機能

森林のもつ土砂流出防止機能については、いまさらいうまでもない。琵琶湖を例にとれば、田上山からの土砂流出のため、天井川が生じ、淀川は氾濫を繰り返して、その治山事業は徳川幕府以来の事業であった。土砂流出の原因は、燃料と肥料獲得のための過度の伐採、柴刈り、落ち葉掻きのために森林が成立し得ず、砂防工事が成功し得なかったのである。戦後、ガス、電気の普及と化学合成肥料が森林の回復と砂防工事の成功を導いたという皮肉な現実である。かつてのこの状態を、現在、中国長江南部一帯に広く見ることができ、水源涵養機能、すなわち森林は洪水を防止し、乾燥期にも下流に清水を提供する機能をもつというのが定説であった。これに対し、夏期干ばつに苦しむ瀬戸内海一帯の農民は、山火事があれば麓の貯水池の貯水量が増えることからむしろ山火事を歓迎し、論争が起こった。日本や北米の集水域における量水堰を使つての実験では、森林の伐採により樹冠層からの雨水の蒸発と葉からの蒸散は減少し、年間流出量は増加するとして、農民の経験が正しいことを立証し、林野庁や建設省を困惑させた。

田上山一帯の集水域で二十年間以上にわたって水文学研究を行った、福嶋さんらの研究は、この問題に科学的な解釈を与えた。そして裸地から成熟林に至る百年間の森林降水の構成要素（直接流出、基底流出、蒸散、蒸発、樹冠遮断蒸発、貯留量）の配分比の動態を、時間、日、年など任意の時間単位で、定量的に表現できるモデルを提示した（図2、福嶋一九八七）。

この図によると、裸地から森林の成立にともない、はじめの約二十年間は蒸発散率が急激に増加する。すなわち森林から流出する年間の水量は低下する。しかし、それ以後は、年流出率は一定となる。

この時期は、森林の葉量が一定になる時期にあたる。

一方、降水時に地表を一挙に流下して洪水の原因となる直接流出ではなく、土壌層を通過してゆっくり流出する、下流水域にとって利用しやすい基底流出率は、二十年目までは、やや減少するが、その後は増加を続け、洪水の原因となる直接流出率は減少する。この傾向は、皆伐によって森林土壌の孔隙率は当初減少するが、森林の生育発展にともなっておこる

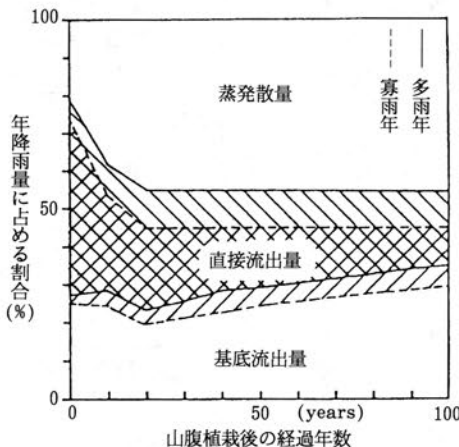


図2 風化花崗岩山地はげ山の山腹植栽工事後の水収支変化（福嶋、1987）

土壌理化学性の改善、土壌肥沃化の流れに対応している。

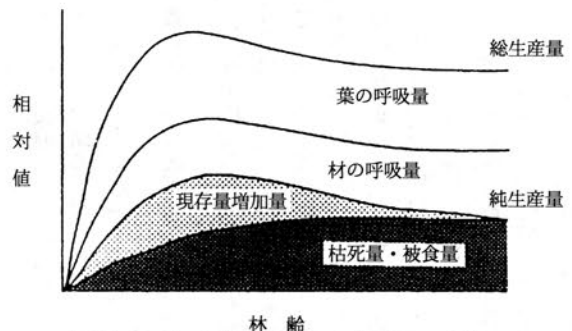


図1 同種、同齢林における生産量などの林齢にともなう変化を示す模式図

少しでも多く水が欲しいとの立場に立てば、森林はないほうがよい。しかし、侵食や洪水から国土を保全するためには、森林の存在が望ましく、かつ、それは渇水時でもある程度長く、流水を継続維持することになる。

■森林の水質浄化機能

植物にとって重要な養分物質である窒素やリンは、この頃は、富栄養化物質と蔑称(?)される。降水と森林流出水(渓流水)を比べると、アンモニア態窒素は、間違いなく、渓流水で濃度、量とも小さい。硝酸態窒素は森林によって異なる。ところがアンモニア態窒素と合計しても、渓流水のほうが大きい森林がある。

隣り合った、同じような土壌に成立している森林で渓流水の硝酸態窒素濃度を比較すると、成熟した古い森林からは、若い森林からに比べて高い濃度が流出する。はじめ、この結果が出たとき驚いたけれど、考えてみれば、当然である。森林生態系の物質循環が平衡に達した、成熟した老齢の森林は、新たな養分物質の系内への収入を必要としないのである。肥料としてよいし尿を出すのは、金持ちのご隠居で、逆は妊婦と子供であるといわれる。森林も似たような反応をするのである。

カリウム、カルシウム、マグネシウム、ナトリウムなどは、ほとんどの森林で渓流水の濃度が高い。これも当然の話で、岩石が風化をうけて海に運び込まれ、そこで堆積岩になるのは、地球誕生以来の歴史である。

(京都大学農学部教授)

秩父宮妃殿下を偲ぶ会

松田雄一

秩父宮勢津子妃殿下がお亡くなりになられてから、一年祭も過ぎた九月十八日午後三時より、東京有楽町の第一生命本社六階会議室において、標記の会が開催された。妃殿下にゆかりの深かった、結核予防会、日本赤十字社など関係七団体の共催によるもので、約三百五十名が出席した。結核予防会会長・島尾忠男氏の開会の挨拶、黙禱に続き、江間守一、倉田保雄、小野寺百合子の三氏から妃殿下の思い出が語られた後、ビデオ映写によるお懐かしいお声を拝聴し、在りし日の妃殿下をお偲び申し上げた。さらに、陸連会長・青木平治氏、ラグビー協会会長・金野滋氏、がスポーツにご理解の深かった妃殿下の思い出を、晩年のご様子を島尾氏が語り、最後に親戚代表として松平恒忠氏のご挨拶、日本赤十字社社長・藤森昭一氏の閉会の言葉で終了。

引き続き別室においてティーパーティーが開催された。

なお、この日に合わせて結核予防会が編集し、「秩父宮妃殿下を偲ぶ会」より刊行された「思い出の秩父宮妃殿下」が出席者全員に配布された。本会からは堀田弥一、織内信彦、渡辺兵力、山田二郎各名誉会員、大塚博美、松田雄一元副会長、中村純二副会長夫妻、今西芳子、小原晴子の十名が出席した。

追悼

春田俊郎先生を偲んで



岸 栄

春田先生は九月十七日、心筋梗塞のため急逝された。亡くなられる三日前にはご令嬢の結婚式に出席され、十一日後には今年二度目のネパールへ向けて、昆虫の調査のために出発される予定だったというのに。先生との出会いは、戦後間もない頃のオンボロ校舎に遡る。

「この学校には勿体ないような先生です」

新任の先生を紹介する教頭先生の言葉を私たちは「また教頭の口癖が始まった」と受け止めていた。

しかし、それが紹介の儀礼的な賛辞ではなかったことは、ほどなく私たちにもわかってきた。けれども、授業以外でも熱心に標本作りなどの指導をされていた先生が、多くの学術的な業績をあげておられていたとは、私たちは知らなかったのだ。

ある日の教室で先生は、以前穂高岳で墜死された兄君のことを淡々と話された。それは先生と山とのかかわりを私が知った最初であったが、衝撃がいつしか感動に変わっていった。

肉親の死という悲しみを乗り越えて、明るく生徒と接しておられる先生の姿に、それぞれの戦中、戦後を抱えながら学んでいた私たちは、どれほど励まされたことだろう。

日本山岳会入会の紹介者になっていただき、その後会報編集委員の末席でお世話になっていたある晩、委員会も終わろうという頃、なぜか話題が「追悼文の生前予約」?に及んだのだ。「お願いしますよ」私に向けられた先生の目は笑っていた。「冗談でしょう」と私も笑った。「若い人の血をもらったので若返り

ました」と喜んでおられた心臓バイパス手術成功から何年後であったか、お元気に精力的に、多忙な毎日をこなしておられた頃だった。

しかし、今年の「……まず、『元氣』の部類にとどまっております」という年賀状が、先生からの最後のお便りとなった今、私の心は動いた。「恩師のあの冗談を真に受け止めることが、教員会員の最後の務めではなからうか」と。

蝶の先生は足しげくヒマラヤに通い、いつの間にか蛾の先生になっていた。そして今年三月、平成七年度秩父宮記念学術賞を受賞された。会報「山」六一号の写真に見る先生の笑顔を思い出すとき、「この春の受賞でよかった」と思うのは、私人ではあるまい。

享年七十三歳。あまりにも早過ぎるお別れの日がきた。瀬田の寺院を後にされる先生の棺は、旧制松本高校の学友による賛歌の歌声に包まれていた。境内には、どこから飛来したのか黒い揚羽蝶の姿が……。空を飛ぶ蝶の高さからはまだ葬列は見えていたのだろうか。

「春田先生、どうぞ安らかにお休みください。蝶もお別れを惜しんでいますよ」

自然界のお見送りは静かに続いていた。

海外の山

小西政継 マナスルに消ゆ

江本嘉伸

「日本人の山」マナスルから小西政継が帰ってこない、ということを知ることが想像しただろう。

もっとも、加藤保男が帰ってこなかった時も、冬のマッキンリーに植村直己が消えた時も、その五年後、やはり冬のマッキンリーから山田昇ら三人の悲報が入った時も、カラコルムのウルタル2峰で長谷川恒男が雪崩にのまれた時も、誰も遭難なんてまったく「予測していなかった」のだ。

ただ、小西政継の場合、「無酸素、全員登頂主義」ともいうべきヒマラヤ登攀史に残る激しい登攀から離れてもう久しかった。いわば「小西流」を捨て、マイ・ペースの「有酸素ゆっくりに登山」に楽しみを見いだしていたようにみえるだけに、今更なげ、と無念の思いがつのるのである。

ダウラギリ、シシヤパンマに次いで小西と組んで三度目の八千メートル峰に挑んだ石川富康によれば、今回小西は前二回にもまして調子は良

さそうだった、という。

登稜会隊(三人)との合同での登山だった。シェルパを含め、合計十人。小西は個人装備のほかに自分で考案した気に入りの軽量テントをいつも背負い、ふだんはひとりですのテントで休んだ。

しかし、アタック前後の行動経過を見る限り、大詰めになって体調はかなりきつかったようだ。

九月二十六日小西たちはC3(七六五〇メートル)を目指したが、この日C3入りしたのは石川だけ。小西はC2(七二〇〇メートル)まで引き返した。

翌二十七日、小西はやはり途中でC2に戻った。一方、石川はシェルパとともに午前十時過ぎ登頂、チヨーオユー、エベレストを含め五十九歳にして八千メートル峰五座の頂に立った。韓国人とそのシェルパ、イタリア人も同じ日に登頂した。ただ下山時目が見えなくなり、この日はC1まで下りるシェルパとわかれC2泊まり。翌二十八日、小西と行動予定だったシェルパに付き添われてC1へ下り、二十九日ベースキャンプに生還した。

「シェルパレス」になった小西は二十八日C3入り。二十九日は体調悪く停滞した。三十日、ブリザードが

やむのを待ったため出発は午前十時と、異様に遅いものとなった。無酸素登山の登稜会の三村雅彦(三三)と有川博章(二七)も遅れて出発した。

小西の登頂は午後五時半頃。三村、有川も六時四十分には登頂した。下山間もなく七八〇〇メートル付近で座りこんでいる小西を発見し、三村たちが合流して下ったが、C3に戻れたのは有川だけ。三村は小西ともどもビバークを強いられた。

このビバークのさなか小西政継はいなくなった。何が起きたのかは不明だが「登攀と無事下山はすべて本人の責任」と言い続けてきた小西の持論をあてはめれば、小西は自分の責任において帰らなかったのである。

有川、三村も苦闘が続いた。疲労困憊状態に悪天候が加わり、シェルパに助けられてC1まで下ったものの、四日には二人のテントが雪崩に埋まる事故が発生、除雪で外に出ていたシェルパが掘り起こしてくれなければ、惨事となるどころだった。結局、二人はヘリに救助され十月七日、カトマンズへ運ばれた。

マナスルに日本人が初登頂してから四十年、そのなじみの山から、戦後を代表する非凡な登山家が、こうして帰らなかった。

JAC
支部だより

全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

秋田支部

東北ブロック秋田集会
懇親を深めた太平山登山

六月二十二、二十三日、平成八年度の東北ブロック集会は、秋田市の仁別国民の森・太平山（一一七〇・六メートル）において開催された。

秋田支部としては、秋田駒ヶ岳、高松岳に続いて三度目の開催であり、かつて指摘されたとおり、山屋の原点到に少しでも戻し、気軽に参加できるシステムとして実施してみた。

太平山は低山であるが、日本三百名山の一つであり、美しいブナ林と天然秋田杉、日本初の山頂でのソーラー発電、それに数多くのカモシカの生息地としても知られている。また最近ではクマゲラが発見されて南

限地を更新するなど、古来より三吉信仰で栄えてきた秋田市のシンボルの山でもある。

二十二日十七時三十分、総勢六十八名が参加し、登山口の仁別リゾート公園内・森林学習館において開会事務局担当者挨拶の後、恒例の懇親会を行った。進藤副支部長の開会の言葉に始まり、岡田支部長の歓迎の挨拶、そして来賓代表として次期開催地に決まった福島県の佐久間支部長の挨拶と続く。遠路参加された東海支部の妹尾幸雄会員の乾杯の発声、さらに各支部の自己紹介があり、各支部自慢の地酒で賑やかな宴となった。明日の登山を考慮して、少し早めの中締めとなったが、例によって深夜まで懇親を深め過ぎた会員もいたようである。

二十三日、登山口の旭又駐車場で午前八時十五分に、往復班と縦走班がともに出発。空模様は曇りがちだが、名物のヒメシャガと美事なブナ林に励まされ、一路山頂へ向かう。途中、冷泉・御手洗で一休みの後、七曲りの坂を経て山頂へ。

一行、十一時頃から続々と山頂に到着し、早速昼食タイム。記念撮影の後、縦走班は次の目標の赤倉岳へと向かう。

笹森付近からタケノコに誘惑される者もチラホラ見受けられる。十三

時四十分、全員赤倉岳に到着。早速杯をあげたが、今にも降り出しそうな空模様、一同追い立てられるようにして下山開始。ブナ林を一気に下り、旭又駐車場に十五時三十分無事帰着。来年の福島集会での再開を約し、流れ解散となった。

各支部のご協力に心からお礼申し上げます。
(佐々木民秀)

岡田支部長の古希を祝う

その一・沼沢山

去る七月二十八日、秋田支部の例のハシゴ登山が岡田支部長の古希の祝いをかねて行われた。その一つ沼沢山（ぬまのさわ山）は標高三四六メートル、頂上には三角測量の標石一等三角点が置かれており、山林、平野の多い仙北地方でも重要な役目を持っている。

J R 峰吉川駅入り口から大曲方面へ向かい、二〇〇メートルほどで広域林道、峰吉川線に入る。雑木林、赤松林など、雨水で洗われ削られた道を約三十分ほどで登り口に到着する。登り口は道路を通すため切土されていて分かりにくく、樹齢四十年の松の木が目印。誰かが結んだ「マムシに注意」の色あせたビニールテープがついていた。路肩に駐車して登ることになるが、この道路を直進

すると国道四六号線に出る。

歩き出してすぐの急な登りを越えると、杉の植林と赤松まじりの雑木林になる。コブを三つ越えると四つ目が頂上で、約八〇〇メートルの距離、三十分で到達する。周りは広葉樹の自然林に囲まれ、展望は期待できない。三角点の周りは五×一〇メートルほど刈り払いしてある。途中にある明治天皇御野点所といわれる峰の山頂上の四阿屋で、巡幸の通ったであろう昔を思いだってみるのもこのコースの楽しみの一つであろう。参加者二十六名。（佐藤 税）

その二・岡田山

沼沢山一等三角点（補点）の探索を終え、「まほろばの里」淀川の川辺で早めの昼食をとった一行は、当支部長古希の祝いとして同名の「岡田山」に向け、車に分乗し出発する。中村集落を右に見て進むと、岡田山頂を越え東西に走る高圧送電線に達する。農道に乗り入れて車をデポし、ムツとする夏の草いきれの中を頂へ向かう。藪こぎを覚悟していたが、送電線保守通路が整備されていたため登高は楽々。女性軍はわらび羊歯の中から晩生のわらびを摘み取りながら約十五分で頂上に達する。

標高一〇四・七メートルの三角点標は送電線パンザマスト一五二号より北二〇メートルほどの藪の中に発

見。周辺の刈り払いをした佐藤昭義
会員手作りの冷えたスイカ、バナナ、
酒などを標柱に供えた。

岡田支部長がカットしたスイカで
全員の喉を潤したのち下山する。

車のデポ地点で「ママシ発見!!」
の声。よく見ると尾の切れた山かが
しらしい。放してやれ、の声に一命
を取り止めた。岡田山に別れを告げ、
十三時三十分次なる目標太平山に向
かう。参加者二十五名。(進藤 昭)
その三・太平山

「たいへい(太平または大平)」と
名のつく山が県内に八座ある。その
中の一つ、標高二七〇メートルの大
平山は、仙北郡西仙北町刈和野東部
の丘陵地帯の一角にあり、三等三角
点前には「黒森山山頂」(別名の標
柱がある

さて、ハシゴ登山のしんがりがこ
の太平山である。岡田山で盛大に、
支部長の古希を祝ったあとの虚脱感
も手伝って、三番目に向かう足取り
は決して軽くなかった。しかも、
晩の懇親会の時間も気になり出し、
不平もチョッピリ聞かれる太平山行
きとなった。

とはいっても、根は山好きの集ま
り。牧場の駐車場にいた時には、
全員が意気揚々と最後の頑張りを見
せた。

駐車場から少し戻って「新奥の細

道・黒森山遊歩道案内」の大きな看板
を左手に見ながら牧場のゲートをく
ぐり、四輪駆動車なら走れるほどの
道をゆっくり登る。黄金の道と
名付けられたこの道、乾燥した牛の
糞がいたるところにあるからカナ、
などと妙に得心したり感心したり。
そうこうしているうちに二つ目のゲ
ートに出て、間もなく壊れかけた「あ
ずまや」に着く。かつて、ここにテ
ントを張って大曲の花火見物をした
仲間もいるほど、ここからの眺めは
満足のいくところ。

さらに五分ほど登れば、黒森山三
吉神社の祠と側に三角点、少し奥に
東北電力の無線中継所の建物がある。
三吉神社に支部長による玉串奉納の
あと、再び万歳を三唱して最後の目
標、懇親会場へと向かった。

参加者二十三名。

(鈴木要三)

宮崎支部

九州島発祥の山 (九月定例山行 揺岳・祇園山)

■ああ四億年のしずく

毎月の定例山行の前夜は、少年時
代の遠足か運動会の雰囲気似て、
期待感と興奮から睡眠不足になる。
メンバーは職種・年齢差・男女など
さまざまだが、自然の風と光、樹木
と草花、岩肌と水など、出会いと新



歌人・若山牧水の生家に立ち寄り詩的感覚を満喫

鮮な感動を求めて、登山を試みる仲
間との交流が楽しさを倍増させてく
れるからであろう。

今回は、県北の名山揺岳(一三三
五・二メートル)と祇園山(一三〇
七・一メートル)である。揺岳の地
質は、古生代二疊紀の砂岩、石灰岩、
粘板岩、チャート、輝緑凝灰岩など
からなり、石灰岩の中にはフズリナ
(紡錘虫・原生動物の一群で有孔虫
類の一種)を内蔵するという。祇園
山は、「四億年のしずく」の水が湧
き出るといふ鞍岡火成岩で貝の化石
などを内蔵した祇園山層と呼ばれる
古生層の地質。四億三千万年前のク
サリサンゴ・三葉虫・腕足類など海

中であつたシルル紀のもので、日本
で最も古い化石が出土するという地
質学的に貴重な山である。

九月十五日、JAアズム出発午前
七時。国道一〇号を北上、美々津か
ら耳川に沿って東郷町坪谷に立ち寄
り歌人若山牧水の生家を訪ね、詩的
感覚を満喫して諸塚村飯干峠へ。西
南戦争で敗走した薩摩軍の記念碑前
で一呼吸、大仁田山スカイラインの
新設林道を四駆車の力を借りて登山
口へ。なだらかなコースを八分で大
仁田山頂着。ヒノキ・スギの植林の
合間に咲く薄紫のツリフネソウが印
象に残った。正午には、たわわに実っ
た稲穂、沿道のヒガンバナに迎えら
れて五ヶ瀬町三ヶ所へ。

大石峠からの登山道は藪の中。こ
こもまた西南の役で官軍に備えた薩
摩軍陣地の塹壕跡があり、夏草が生
い茂り、兵どもの夢の跡を追う。尾
根沿いに登るとブナ・アカマツ・ケ
ヤキと根締めのスズタケを縫って鞍
部まで五十分。直登を控えて、ミカ
ンとボカリスエットの酸味と甘味の
補給は格別。汗を流すことによって
これほどまでに味わい深いものにな
るのかと、汗に感謝する。鞍部から
の厳しい急登を一気に登り、十分で
山頂着。天候、視界とも良好。秋の
陽は柔らかに霞がたなびき気分最高。
途中、大木ブナの風倒木には自然の

徒に従ったものとはいえ無残、貴重
な財産を失った思いである。

大石公民館着十六時五分。夕食は、
会員特製のカワバタナベを囲み地区
の公民館長親子を交えてのひととき、
「焼畑の顔」「嫁捜し」「農山村の後
継者育成」「過疎化対策と村おこし」
と話題豊富、地域のひとの心豊かな
交流が続く。夜半には、満天の星空
を仰ぎながらの談笑と、心ゆくまで
山郷の初秋を楽しむ。

■西南の役攻防の峠

二日目(九月十六日)、公民館の
サイレンに山郷の夢を破られて六時
起床。特製のオジャで腹を満たし、
公民館の清掃、整理をして出発。再
び大石越え登山口へ。昨夜の交流会
の席で祇園山登山口周辺にはマムシ
に要注意の提言があったのを思い出
し、全員防衛的感覚で登山開始。し
かし、登山道は地区の人々によって
整備され、毒蛇の被害予測は消える。
急登にもめげず全員快調。九州誕
生の山といわれるこの山の歴史と人
間とのかかわり合いを想像しながら、
木陰に咲くホトトギスに励まされて
高度を上げる。時折吹き抜ける秋風
は股間を凌駕して涼味満点。四月下
旬から五月上旬に咲くアケボノツツ
ジと岩肌のコントラストに思いを馳
せ、参加者は来春の再登山を誓った
に違いない。

一時間の登りで九時山頂着。三六
〇度の大バノラマは圧巻。北に阿蘇
連山、九重連峰、北東に祖母嶺、大
崩山山塊、東に諸塚山・赤土岸山、
大仁田山、黒仁田山など、南に揺岳、
西に向坂山から九州脊稜山脈が続く。
静かに、連なる山脈を幾度となく見
やっては眼に心に焼き付ける。

二十分の休憩の後下山開始、西南
戦争の塹壕の跡地のある大石越えに
到着。昨夜、交流会で歓談した館長
親子がこの大石越えで高原野菜のキ
ャベツを生産しており、下山して再
会。五ヶ瀬の新鮮な野菜の味へ思い
を込めて、交流に感謝して椎葉、西
米良を経由して帰路につく。

帰路のコースでは五ヶ瀬ハイラン
ドスキー場、新設の国見トンネル(二
七七メートル)、十根川神社の八
村杉(根回り一九メートル)、桑の
木林道の「まる井の水場」も山行の
記憶にとどめておきたいものだ。参
加者九名。(井野元 繁)

山形支部

秋田駒ヶ岳から

乳頭山(烏帽子岳)縦走

先月の会津駒ヶ岳に続き、秋田駒
ヶ岳、乳頭山を歩き、温泉にも入る
二泊三日の少々贅沢な山行を企画し
た。



最後の登りに汗を流して乳頭山頂上

九月十四日、総勢七名は二台の車
に分乗し、山形を九時出発。国道一
三号線を北進。黄金に輝く田園風景
を車窓から眺めながら一路秋田に向
かう。途中、六郷町の坂本東嶽邸、
まぼろしの白岩焼展示場を見学し、
田沢湖高原ホテルに十五時過ぎに到
着。早速温泉に入り、明日の体調、
天候を祈り早々に就寝。

十五日、駒ヶ岳八合目までの車道
はマイカー規制のため、田沢高原発
八時のバスに乗車。三十分で終点の
駐車場到着。小雨のバラつく中を出
発。眼下に田沢湖を見ながら十和田
八幡平国立公園を歩き始める。

阿弥陀池の木道を渡り、一六三七
・四メートルの女目岳に登る。キバ

ナノコマノツメの群生があり、ダケ
ブキが花の終りを告げていた。山頂
で記念撮影し下山。池の畔の避難小
屋に立ち寄り休憩。

駒ヶ岳は、円錐状複式火山で、カ
ンラン石、安山岩の溶岩、火山碎屑
物からなり、カルデラの中に中央火
口丘、女岳があり、昔は妾岳と呼ば
れていた。カルデラの西に男岳があ
るから女岳がモトメということにな
る。これらを、女岳、女目岳と書く
ので理解しがたい。

避難小屋右手より尾根を直指して
登りにかかる。分岐点の標識あたり
から、ようやく火山らしい山容が姿
を見せる。天候も大分よくなってき

パンフレットをご請求ください。

クルーズ16日間

¥565,000～¥1,075,000

出発日 ●2月7日●2月16日
●2月25日●3月6日●3月15日



南極は日本の37倍



運輸大臣登録旅行業490号/日本旅行業協会正会員/JATA公認代理店

ALPINE TRAVEL SERVICE 株式会社

本社/〒105 港区新橋2-13-8 新橋東和ビル5階 TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06-444-3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557
仙台 ☎022(265)4611 広島 ☎082(542)1660 札幌 ☎011(711)7106
(株りんゆう観光)

た。ここから焼森を経て、湯森山を目指す。写真を撮りながら色づき始めた景色を楽しみ歩を進める。湯森山で正午、ここで昼食。

ウスユキソウが随所で見られ、コケモモ、ガンコウランが実をつけてはいるが、食するには少々早いようだ。湯森山を過ぎるあたりから少し疲れも出てきた。コースがよく見えることもあり、各自それぞれのペースで歩くことにする。

笹森山は、まさにザルを逆さまにしたような形をなし、緩やかな登りが続く。エゾリンドウの鮮やかな色にたびたび足を止める。縦走路最後の登りに汗を流して、乳頭山の山頂には三時に到着。右手後方は雲が切れ、裾野までよく見える岩手山、正面に森吉山と展望が素晴らしい。ここから下りとなる。池塘も眼下に見えるが、泥道の悪路で足をとられ慎重に下る。

田代平山荘前にて休憩。素敵な小屋で快適に過ごせそうな立派な建物だ。五時に孫六の湯に到着。

孫六の湯は、黒湯の川を隔てて隣にあり、先達川と乙女沢の合流点にある。明治の時代に石神村の孫六という人が発見し、その名が残ったといわれている。温泉は河原のあちこちに湧き出している。河原に湧くから別名カラコの湯ともいわれ、今で

は珍しいひなびた温泉である。食塩性硫黄泉は眼病、心臓病、脳の病、神経衰弱などに効能ありとか。露天風呂で沢音や景色を楽しみ、山の疲れと汗を流す。

三日目は好天。点在する乳頭温泉郷を車で一回り。妙の湯から始まり、大釜温泉、蟹湯、鶴の湯本館、別館とめぐるが、いずれ劣らぬ落ち着いた温泉郷である。

我々が歩いた駒ヶ岳と乳頭山が一望できる田沢湖畔で休憩。角館の武家屋敷も見学し、稲庭に回り名物のうどんも賞味し、ガーベラ、コスモスなどの咲きそろった街道に満足しながら帰途についた。(大場貞吉)

越後支部

創立五十周年記念山行 越後駒ヶ岳と銀の道

関西支部に次いで古い伝統を持つ越後支部は本年で半世紀、創立五十周年を迎える。これを記念して去る九月二十八、二十九日の両日、懇親会と健脚組の越後駒ヶ岳(二〇〇二・七メートル)、ゆっくり組の銀の道(二二一〇メートル)の二つの山行が行われ、いずれも盛会、無事に所期の目的を果たすことができた。まず懇親会場は古くより越後支部なじみの大湯温泉の村上屋旅館の大



記念山行出発前、73人が勢ぞろい

理事が「これを機に越後支部のますますの発展を祈念する」と祝辞を述べた。そのあと室賀輝男副支部長の音頭で乾杯、歓談に入った。地元からの銘酒の差し入れ、会員の自己紹介なども加わり、宴は大いに盛り上がり、翌日の山行が心配されるほどであった。なお、支部からの記念品は藤島初代支部長考案の支部章で、裏には今回の年号が刻印されたループタイ。

翌二十九日は昨夜の盛大なお天気祭りの甲斐あって絶好快晴の登山日和。六時に全員旅館前に集合して記念撮影のあと、越後駒組、銀の道組ともに二台の大型バスに分乗して出発した。バスは延々と続く車道を登り詰め、枝折峠で越後駒コース組は下車、七時過ぎ朝食、軽い準備体操のあと登山は開始された。

広間。二十八日十八時より県内外からの会員七十三名を集め、事務局担当の田邊信行会員の司会のもとに開会された。

冒頭、五十嵐篤雄支部長が、昭和二十一年の支部創立のいきさつから歴史に触れながらの歓迎の挨拶を行い、ついで本部を代表して小倉厚前

リーダーは藤井信、サブリーダーは井出秀雄、山崎幸和、土田幸雄、井口拓夫、先導は桜井正吉の各会員、参加者は五十四名、無線、ドクター、看護婦付きの万全の体制。

越後駒ヶ岳は周知のごとく深田久弥選定の日本百名山、前方にその秀麗な姿を表している。今年は豪雪

次代に残そう美しい山と溪

だったためか珍しくまだ残雪が見え、山頂付近は紅葉が始まっていた。
他方、銀の道組は急に淋しくなったバスで、雄大な奥只見の山々と湧き上がる雲海を愛でながら銀山平へ急降下、車道ともっとも近くなった三合目（オリソ）で下車、朝食、登山開始となった。
銀の道とは文字通り銀山平の銀を運んだ道で、石抱と駒の湯を結ぶ全長一二キロ、最高点は明神峠、往時は無慮数万人が往来した人間の汗と涙の歴史の道である。道は鉾山閉山とともに歴史から消えたが、近年復活され、一服場となった地点には合目標が設置され、その由来となった名前が付され、よく踏まれた道跡とともに往時をしのばせてくれる。ちなみに八合目水場には今でも清らかな水があり、九合目問屋場は広場で季節遊女までいたという。
銀の道参加者は十六名、リーダーは五十嵐支部長、サブリーダーは内藤修、早川英夫の両会員、先導は田邊事務局長。秋の越路の展望とキノコ狩りに興じながらも、さすがはJAC会員、登山は快適、倒れなかった大明神を過ぎ、目標の明神峠へは

仙台が誇る「山の先達・二人展」を終えて

九月十日から二十三日までの約二週間、仙台市博物館ギャラリーにおいて、登山家・楢有恒氏とピッケル名工・山内東一郎氏を紹介する展示会を開催しました。

宮城支部

予定より一時間も早い十時過ぎに着いてしまった。持参のビール、ウイスキーで祝杯、記念撮影。
駒ヶ岳組もこれから順調な登山を続け、小倉山、百草の池、山荘とさすがに最後はやや隊列は乱れたものの、ほぼ全員が登頂、個々それぞれに記念撮影、昼食となった。下山は急峻な小倉尾根、ランプの湯で有名な駒の湯には十六時八分、予定をわずか八分遅れの順調さで到着した。
銀の道組はすでに日本坂、仏堂、千体仏と撫の道を快適に下り、駒の湯には十三時、大湯には十四時、かくして駒ヶ岳組を出迎えた。ここで一浴、それぞれの帰路につき、越後支部創立五十周年記念にふさわしい行事の幕は閉じた。(小倉 厚)



「山の先達：二人展」オープニング当日、全員集合!!

展示品の大部分はJACが所蔵するマナスル登山関係の品々をお借りしました。また仙台市をはじめ大迫山岳博物館など多くの方々、物心両面のご協力をいただき、内容豊富な展示になったと思います。展示品は約百点、写真及び説明パネルなど五十点。山内ピッケルは十三本と氏に関する物も多数展示することができました。詳細につきましては後日、報告をまとめる予定です。
オープン式当日には村木会長に記

東京グリーンホテル 都内に3店舗654室

各種ご宴会、ご会合にご利用下さい



水道橋店 ●千101 東京都千代田区三崎町1-1-16 TEL.03-3295-4161

御茶ノ水店 ●千101 東京都千代田区神田淡路町2-6 TEL.03-3255-4161

後楽園店 ●千112 東京都文京区後楽1-1-3 TEL.03-3816-4161

念講演をお願いし、夜は「氏を囲む会」で大いに盛り上がりました。
会期中は多くの来場者を迎え、宮城県知事、仙台市長はじめ、日山協の坂口会長、また懐かしい山仲間にもお会いすることができました。
この企画は、以前から宮城の有志による「山岳博物館設立を考える懇談会」で話し合ってきました。今後、皆様のご協力を得て、ぜひ実現に向けて進めたいと考えております。
最後になりましたが、村木会長はじめご協力いただいたJACの諸先輩の方々に改めてお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

(伊達篤郎)

REPORT

報
告

REPORT

K2登山隊一九九六

盛大に祝賀・報告会

九月二十七日、明治大学創立百周年記念大会会館で、登頂に成功した青年部・K2登山隊の祝賀会をかねた報告会が開催された。二百二十名が参集し、盛会であった。



山本隊員（左端）に引き続いて各隊員が報告

講演会

環境と森林

科学委員会

十月三日、ルームで京都大学教授岩坪五郎会員の講演会が開かれた。地球の有機物生産は、植物の光合

会は大屋総務担当理事の司会で始められ、村木会長の挨拶に続いて坂口三郎日本山岳協会会長、島田公博読売新聞編集委員（前運動部長）の祝辞があり、パキスタン航空の日本韓国地区支配人ワシム・バリ氏の乾杯の音頭で賑やかな祝宴に移った。報告会は、山本篤隊長が謝辞を述べ「今回の成功にとどまらず、これからの登山を大事にしたい」と締めくくり、隊員一人ひとりから自己紹介と感想が述べられた。

引き続き、K2頂上に翻ったJACC会旗と頂上の石が村木会長に手渡された。

そのあと、スライドによる登山の様子が紹介され、参加者は登山隊の功績を称えつつ散会した。（伊藤敏）

成によっている。地球上の生物体総量の九〇パーセントを森林が占めているという。光合成量から呼吸量や枯死量などを差し引いた森林の純生産量は林齢とともに変化し、生産量を上げるためには伐採などで林齢を下げる必要がある。熱帯多雨林の耕地化で現存量、生産量が大きく低下することが示された。また、降雨と表面水、浸透水の流出量の、植栽後の経年変化や、窒素、燐その他金属イオンの降雨による収支に及ぼす森林の影響など多岐にわたった説明があった。

ヨーロッパにおける酸性雨被害は全森林の〇・五パーセントに過ぎないとは今までの常識を覆すものであった（詳細は巻頭記事を）。参加者二十六名。（北野忠彦）

三水会現地集會

あんころ餅と薬湯の集い

九月七、八日、恒例の「あんころ餅と薬湯の集い」は、恵まれた天候の中、三水会第二十回記念の現地集會として開催された。

クラブライフ活動を誰でも気軽に、と諸先輩たちが始めた山研の「あまから集會」もメンバーが入れ替りながら引き継がれ、二十年もたつてしまった。



山研のテラスで

この間には、三十名を超す参加者が部屋に泊まりきれず、板の間やベランダでシュラフにもぐったことも何度あった。平成四年の山研改築時には、秩父の金山平に会場を設定したのも思い出のひとつである。

山の自然に対応し、五感を駆使しての楽しい交流のひとつは三水会ならではの感入。継続は力なり。のたとえ通り参加者のいるうちは山研に集まる所存である。

二十回ともなればスケジュール進行はほとんど狂わず、七日の午前十一時前には松本駅に集結し、あま

山の切手⑭ 一相山之良

世界七大陸最高峰



1978年5月1
29日ネパ
ル発行。ト
ベレスト
登頂25周年
記念。

帰途は悲劇に終わったが、難波康子さんが今年五月エベレスト登頂に成功し、日本人女性としては七五年の田部井淳子さんに次いで、二十一年ぶりに二人目の登頂を記録した。同時に世界七大陸最高峰の制覇も、九二年の田部井さんに続いて達成するという快挙だった。

七大陸最高峰は、当初、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、北米、南米、南極、オーストラリアの各最高峰とされた。だがオーストラリアのコジオスコ(二三〇メートル)は、車で頂上まで行ける容易さのため、範囲をオーストラレーシアに拡張、現在ではニュージーニアのカルステンツ・ピラミッド(ジャヤ山)を含むものが正統と見なされている。アジアのエベレスト(八八四八メートル)

ヨーロッパのエリブルース西峰(五六四二メートル)、アフリカのキリマンジャロ・ウフルピーク(五八九五メートル)、北米のマッキンリー南峰(六一九四メートル)、南米のアコンカグア(六九六〇メートル)、南極のヴィンソン・マシーフ(四八九七メートル)、オーストラレーシアのカルステンツ・ピラミッド(四八八三メートル)がこれである。

ヨーロッパの最高峰については異議もある。カフカス山脈は、黒海のノボロシースクからカスピ海のパクーまで、全長一二〇〇キロに及ぶ大山脈で、ヨーロッパとアジアの境界をなしている。エリブルースは、そのカフカス山脈の主軸から、北のヨーロッパ側に派生した稜線上に位置しているため、モンブランを抑えて、ヨーロッパの最高峰なのだ。

旧定義による七大陸最高峰の完登は、八五年四月、アメリカのディック・バスが達成、新しい定義によるものは、同年十一月、カナダのパット・モローによってなされた。現在まで三十名がこのセブン・サミット・オディッセイを成し遂げたとみられる。

切手では、ヴィンソン・マシーフとカルステンツ・ピラミッドがまだ発行されていない。



左/1986年9月5日旧ソ連発行。双耳峰のエリブルース。1868年フレッシュフィールドらが東峰、1874年イギリスのグローブらが主峰(西峰)に初登頂した。
下/1972年7月28日アメリカ発行。マッキンリーは1910年地元の開拓者登山隊が北峰、1913年イギリス国教会のスタック牧師らが主峰(南峰)に初登頂した。

右/1990年3月3日アルゼンチン発行。アコンカグアは、1897年フィッツジェラルド遠征隊のスイス人ガイド、ツールブリッゲンが単独で初登頂した。
中/1968年3月4日東アフリカ郵便連合発行。キリマンジャロは1889年ドイツの地理学者マイアーとオーストリアのガイド、ブルチェラーによって初登頂された。

らを芯にした献立のもとに、スタッフ全員オードブルからデザート材料まで、段ボール五箱もの買い出しをこなし、昼食も済ませ、一時にはタクシーに分乗して上高地に向かう。途中、松本郊外の地酒蔵に立ち寄り、北アルプス水仕込みの蔵出し銘酒をいろいろ試飲させていただき、もっとも口にうまき良薬湯を調達する。三時過ぎには山研到着。内田さんの出迎えもそこに早速料理の鉄人組はキッチンへ、それぞれの味覚に腕をふるい始める。

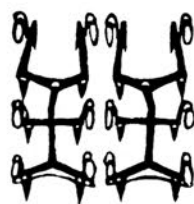
六時から開宴の予定が四時にはテーブルに料理が並び始め、寄進の薬湯、おつまみなどは封を切られ、予行宴集がそちこちで始められてしまう。五時半には大体のメニューができ上がり、木村会員の二十回挨拶を皮切りに宴はスタート。ズラリ並んでいる各種薬湯を次々味わいながらの歓談、グルメをいただくながらの団欒は刻のたつのを忘れるほど。最後のきのこ飯やお汁粉は翌朝に持越しの者もいて、せっかくなでてくれた風呂に入る時間が惜しまれるほど宴は盛り上がった。

翌八日は秋日和。西穂に吟行する人、焼岳上高地散策派、乗鞍高山植物組とそれぞれ目的によって三々五五時間差出発、山研を後にした。参加者十九名。

(勝田房治)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします)



カット 中村あや

山の歌となった劇中歌 『街の子』

どうして山の歌になったのか?

宮下啓三

日本の登山者たち、とりわけ大学山岳部のOBたちの間で歌われてきた歌の一つに『街の子』がある。「山の子」ではなくて『街の子』という題名をもつこと自体が奇妙に思われる。それ以上に、この歌がどこから発したものであるのか謎とされてきた。

一九八四年八月号の「山」で早乙女緩次氏がこの謎について、今は亡き交野武一氏の言葉を引きながら解明を山岳会員に呼びかけた。それによると「そこいらの山の歌集を求めても、この楽しき唄の作者も訳者も、決まって不詳としてある。何ごた、ケシカラン」と交野氏が言ったとの

こと。もちろん、交野氏も早乙女氏とともにこれが森林太郎(森鷗外)が翻訳した戯曲『街の子』から採られたものであることを知っていた。それから十二年後、私は岡澤祐吉氏からこの件について知っていないかとお尋ねを受けた。田口二郎氏がこの歌の由来を知りたがっておいでだとも聞いた。私も刺激されて興味を抱いた。

「そんなにおまえはなぜ嘆く。くさの梅(しとね)に寝ころんで、わしが言うこと、お聞きやれ」

こんなふうにはまるこの歌が必ずしも作者不詳として伝わり続けてきたわけでないことは、同じ一九八四年の末に慶応義塾大学の山岳部とそのOBたちが組織する登高会の発行した『ルームの歌』という小冊子からわかる。一部手書きの原稿をコピー化して綴じた私家版の歌集に「エルヘルム・シュミットボン(独)

の戯曲『街の子』のフィナーレに歌われたという。アメリカ民謡」と記されていた。『ルームの歌』を収めたテープで聞く『街の子』は原書の楽譜にあるものとは似ても似つかない。

実は、一九〇一年に初演されたシュミットボンの戯曲では、劇の開始早々に歌われることになっている。フィナーレではない。大正時代に西洋式の演劇を日本に移植しようとした小山内薫(おさないかおる)が森鷗外訳の台本によってこの劇を上演した。その舞台でこの歌が原作通りに歌われたかどうかは定かでない。

慶応義塾大学図書館に所蔵されているシュミットボンの戯曲の原書の巻末にこの歌の楽譜が載っている。しかし、ドイツ語の原文の二倍以上の長さを持つ森鷗外の訳文をこの楽譜で歌うことはできないし、そもそも訳書に楽譜はつけられていなかった。だいいちこの歌がシュミットボンの作詞によるのか既成の歌であるのか問題となる。だが、既成のものであるならば原書に何らかのただし書きがなければならぬ。それが見当たらないところを見ると、どうやらシュミットボンの創作であって、上演のために誰かに曲をつけてもらった、と推理するのが正しいと思われる。古くからあるドイツ民謡のた

ぐいではない。

小山内薫が『街の子』とロシアの劇作家ゴリキーの『どん底』とを混ぜ合わせて作った映画『路上の靈魂』は大正十年春に封切られた。原作ではドイツ南部のアルプス山脈北面の田園地帯が舞台とされているのだが、小山内は浅間山を背景とする軽井沢をロケ地に選んだ。現存する最古の日本文芸映画として貴重な映画であるけれども、無声であるので山岳歌の出所でありうるはずがない。私の推理がここまでで尽きていた時、伊藤敏氏から重要な情報が寄せられた。旧制山形高校(現在の山形大学)から東大に進んでその山岳部員でもあった伊藤氏は、この歌と山岳部との縁について語る横田敬一氏(旧制二高山岳部OB)の回想記をコピーしてお送りくださった。山形高校から山形大学へと引き継がれた蔵王・片貝沼畔のコーボルト・ヒュッテの建設から五十年におよぶ歴史が文集の形で編まれ、そこに横田氏の文が載った。

その記述によると、佐々保雄氏が東大時代に八高出身の西脇親雄氏からこの歌を習い、東大山岳部のリーダーであった西脇氏が「高旅行部の人から教わったのだという。このことから横田氏は、大正の末頃に『街の子』を読んだ一高生がメロディー

俳句



カット 宇都木慎一

小林碧郎

三水会第二十回山研集會にて

銀河享く吊橋に身の冷ゆるまで

新涼の林中に鐘鳴らし発つ

梅の根に倚りて攀づるや鳴く目細

苔桃の紅たてまつる嶺の神

秋天に人群るる巖鉄鎖垂れ

俳句

南 平吉

八甲田山・岩木山

八甲田山人を怖れぬ秋あきつ

木道に出て一息や夏薊

頂上の祠の見ゆるお花畠

山の汗流す酸ヶ湯の大浴場

岩木山見えて津軽野稻の花

山を背に岩木山神社秋深し

老鷲やリフトゆっくり昇降す

をつけたのかもしれない、と推理した。そして、この歌が山形で『雪山讃歌』とともに高山山岳部の部歌のように愛唱された由である。

以上のような経緯で、伊藤氏からの懇切なご教示によって一高から東大に連なる線上での曲の成立、山形高校山岳部による流布への貢献、そして若溪堂から出版された「山で唄う歌」にこの歌が『彷徨の唄』の題で収録されたことについては東大出身者である人々が編者であったことなどを知らることができた。

ちなみに歌詞のもとになった戯曲は、都会に出て一流の音楽家になることを夢見て故郷と恋人を捨てて出ていった男が、才能の不足を思い知らされ、都会で得た妻子をつれて、尾羽打ち枯らして帰郷するが、厳格な父親が彼を受け入れることを拒んだため、街道をさまよった末に凍死する、という筋を持つ。この劇には、この息子とは対照的に二人の浮浪者が登場する。街道が二つの方向に分岐するところで浮浪者たちが選んだ道が彼らに救いをもたらし、これと違う方向を選んだ男が死に至る。結局私はシュミットボンの原書でも小山内薫の映画でもないところに『街の子』の曲の誕生があった、という事実だけを確認するにとどまっている。

荒川三山から赤石岳の還走

松岡 繁

初老の照内豊（六十五歳）と松岡繁（六十六歳）の私たち二人は八月十五日、樺島から入山した。念願だった南アルプス千枚岳に登り、荒川三山を踏破して赤石岳に登頂、赤石東尾根の急坂を駆け下り、無事に下山した。雄大で重厚な三千メートル級の高峰六座を登高できたことは大きな収穫であった。夏山の最盛期として、県営の山小屋も岩稜も山道も山頂も、登山者の行列で大盛況だった。

一日目（十五日）は富士宮市から富士見峠と井川集落を通り、九時二十分に井川八木尾又の道路崩壊地点手前で車をデポした。急坂を下り、長い吊橋を二か所通り、バス発着所まではい上がる。十三時半にバスに乗り、十四時五十分、樺島ロッジに到着した。登山客でロッジは満員、入浴後のひととき、付近を散策して楽しんだ。

二日目（十六日）は五時半に朝食、六時ロッジを出発した。心地好い緩い登り続け、八時四十分清水平に着く。きれいな冷たい水がうまい。見晴らし岩から荒川三山、赤石岳の稜線と岩稜などの聳える高峰を望み、心は躍動、大感激。ほどなく駒鳥池

に着いた。十二時半千枚小屋に到着し、三十分後軽装で千枚岳に向かう。色とりどりの高嶺の花が咲き、まさに百花繚乱のお花畑だ。途中にはダケカンバとナナカマドの群落。頂上にはハイマツ帯と岩峰巨岩だった。

二百人収容の山小屋は満員。早寝早立ちゆえ十九時には寝る。

三日目（十七日）のコースは標準歩行時間九時間四十分、累積標高差一三五〇メートルの長丁場だから、三時五十分には千枚小屋を出発した。ヘッドライトで照らし、露払いで登高する。五時半には丸山頂上、黎明間もなく悪沢岳に登頂した。近くに堂々たる赤石岳を眺め、遥かに塩見

味の技、心でつくる



むさし坊 日比谷店
(東宝ツインタワービル9F)
千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905

むさし坊 麹町店
(有楽町線麹町駅)
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313

むさし坊 神田西口店
(神田西口通り商店街)
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015

友膳ゆうぜん
(半蔵門線半蔵門駅3分)
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

むさし坊 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

岳を望み、涙が出るような景観だ。巨岩と岩屑の高山帯に感動し、気持ちのよい岩稜の山道を歩いて、中岳に至る。避難小屋の温度計は一〇度だった。荒川前岳の頂上付近では十数羽の雷鳥の親子に見とれる。美しいカールを眺め、荒川小屋に至る手前の沢は金明水にも勝る美味しく冷たい格別の天然水だった。

ダケカンバが現れる荒川小屋は休まずに通過、大聖寺平から三〇三メートルの小赤石岳への登りは急坂で嬉しくなる。駆け足で下りてきた外国青年に「Somebody else?」と聞く。「Two members」と答えた。「Have a nice day」と声をかけ、岩屑の山道を登る。

正午過ぎ、ついに赤石岳に登頂、岳友と握手をして歓喜した。大休憩のあと、赤石のコル(実際は小突起)から大倉尾根を下り、十五時四十分赤石小屋に着いた。こども登山者で満員御礼。夕食は白いご飯とみそ汁、大根の切り干し(実にうまい)、漬物、白魚のフライ、コロケ、シューマイ、マカロニ、キャベツ、食後の果物はミカンとサクランボと至れり尽くせりだった。本棚の山の文献と写真集もありがたく嬉しい。

四日目(十八日)は八時発のリムジンバスに乗るべく、三時五十分には赤石小屋を出発し、急坂の赤石尾

根を駆け下る。積雪期は強靱な体力と頑張り、根性が必要だと思う。七時二十分、樺島にたどり着いた。

山行中は雷雨や強風の悪天候に会わず、八時のバスに揺られて夜には無事に帰宅できた。小屋泊りの縦走ゆえ、充実した登山であった。この山域には一日に数百人が登高するという。多くの人々との出会いと交流、大自然に親しむ喜びは心の真珠ともいえる還走だった。

テントと星空

川崎精雄

脚力減退で山頂が遠いこの頃は、途中テントの厄介になることが多い。昔ならその辺でゴロ寝だったが、今は若い友人がスマートなテントを張ってくれる。大変有り難いが老人は夜中に起きるから厄介だ。入り口ぎわに寝ても寝袋を出る音や、入り口のチャックを引く音に気を遣う。ただしひとり星空を仰ぐのは最高だ。勿論冬山なんて思いもよらず、せいぜい十月末までだが、夜中なら星座が味わる。

近頃は下界の明るさで、山によっては絢爛さが余り期待できない。木曽駒の東にある経ヶ岳(二二九六メートル)では、尾根の登路が尽きる

地点だったから、南アルプスが一望だった上、霜の降る気配の寒気もあって大いに期待したが、結局は眼下の天竜川流域の煌々たる明るさのため、赤みを帯びたどろんとした天界があるだけで、実に味気なかった。秩父の和名倉山(二〇三六メートル)も十月だったが、山が深いのに東京都の明るさで星空はゼロだった。テントを出て見る星空は、山小屋でのそれとは異なる気分の筈だが、次第に味わえなくなるらしい。

小さな自然保護 早池峰山頂の合唱会

坂倉登喜子

今年は宮沢賢治生誕百年祭で、全国的に記念行事が催されていたが、宮沢賢治は生前、山に咲く花を盗む人を戒める詩を書き残していた。

ヨーロッパアルプスの花・エーデルワイスによく似た美しい高山植物として知られるハヤチネウスユキソウを見られるのはここだけであるが、最近盗掘者が横行しており、三十株を盗掘した女性が摘発されたという。

ハヤチネウスユキソウがなくなったら、早池峰山はただの岩山になってしまふ。私たち『早池峰の花を愛する女性の集い』も「貴重な高山植

明日を築き業界をリードする

コンクリート製品の総合メーカー

 前田製管株式会社

本社/酒田市上本町6-7

☎ (0234) 23-5111

物を守りましょう」と呼びかけた。

七月十三日、盗掘防止を願って全国から集まった女性たちと早池峰奥社前に集まり、エーデルワイスの歌を原語で歌って献歌した。地元大迫の合唱団の方たちも加わり、晴れ渡った青空に響けとばかり力いっぱい歌った。周りを囲む岩山に反響して素晴らしい大合唱だった、と賞賛された。コーラス参加者と花を愛する女性たち五十名は大感激。

河原坊に下山後、宮沢賢治の碑前で大迫の合唱団とともに「みどりの早池峰を合唱し、いつまでも早池峰の花が豊かに咲き続けるよう、盗掘防止の自然保護を訴えたのである。

図書紹介



カット 中村あや

森田秀巳・松倉一夫・著

『山の常識・非常識』

神々の座の山、鬼やおろち、悪霊の棲む里山の話は遠い昔話となってしまった。今ではレジャー・ハイキングの場として日常の延長線上にある。しかし、自然は変わららず、ヒマラヤから里山まで話題はますます賑やかである。

著者は「このあたりで皆さんとマナーとか常識とかいうものを少し真面目に考えてみたい」と、第一章・山の非常識大賞——二十一項、第二章・こんなマナーはごめんだ、第三章・初心者とベテラン、男性と女性、お互いが感じる非常識、第四章・山の常識、非常識を検証、第五章・山の基礎知識より大切なもの——とまとめている。

山の基礎知識を身につけ、山を敬う気持ちを忘れずに自然にやさしく接すること、また「山のマナー」もま

た学ぶべき時代」になった、山岳部や山岳会のリーダーをはじめ、多くの人たちに手に取っていただき、一助にもらえれば幸い、と結んでいる。(三沢一三)

一九九六年六月 山と溪谷社発行
二〇五ページ 九百八十円

小林静生・著

『山の本屋の手帖』

この本は、山と山の本の好きな古書店主の随筆・随想集である。内容は「山の本の楽しみ」「私の山」「山の本屋つれづれ」の三つの章からなる。全体を通して、山の本の話、古本にまつわるエピソード、古書業界の打ち明け話が多いのは当然として、そのほかに世の動きの断片を身辺雑記ふうにとりあげて書いたものの中に、鋭い目を感じることが出来る。

全四十三編中、私はとくに次の三編に興味を持ち、注意深く読んだ。それは、冠松次郎の生家と墓の現在地を探访する「冠新道」(ここでは両方とも確認できなかった)、野中到の墓を訪ねる「墓」、第二高等学校山岳部宛の「木暮理太郎の手紙」(入手した経緯と内容の一部)である。

そして、内心忸怩たる思いであった。というのも、会員の一人として、日頃もっと山の先輩たちの様々なこ

とを知りたいと思いつながら、実際にはそのための行動をとっていないからである。

最近の山の本は、自分史的登山記が多いが、その中であって本書はとて新鮮に感じた。活字も大きく、装丁、造本ともいかに趣味の本という趣がある。(若瀬皓祐)

一九九六年五月 鹿鳴荘発行
二二四ページ

柏瀬祐之・著

『午後三時の山』

本書は表題となった「午後三時の山」をはじめ、十二編の紀行、感想文を収めている。

「午後三時の山」は、かつて偶然に山で知り合った、年齢も、職業も、生活環境も異なる六人が、雪の知床をスキーで縦走するまでの経緯とその紀行である。別に午後三時に山頂に立とうと計画し、ひたすら山頂を目指すというわけではない。

ここで「午後三時」とは、季節でいえば九月末、人の年齢なら四十、五十歳の頃を指すのであろうか。何となく来し方を振り返り、感慨に耽り始める頃ではある。

著者もそれを意識してか、あえて自虐的に滑稽画風に書き綴っているが、ここに書かれている紀行は、郷

里足利市の裏山を歩くという小さな山歩きまでも含めて、硬質な個性がキラリと光るものばかりである。(若瀬皓祐)

一九九六年五月 白山書房発行
二三四ページ 千八百円

栃木県高体連登山部中国チベット学術登山隊一九九五実行委員会・編
『輝ける白き峰』

ニンチンカンサ西稜初登頂の記録

創部三十五周年を迎えた栃木県高体連登山部の五度目の海外登山。昨年八月高校教師によりラサ南西に位置するニンチンカンサ峰七二〇六メートルに未踏の西稜から隊員十一名とシェルパ三名が初登頂した記録である。

彼らは十二回の低圧室訓練を行い、高度順化をかねてネパールから車で入山する。荷物は成都・ラサの空路で運ぶ。

モンスーンの降雪やC1上部に広がる五五〇メートルに及ぶ急峻な雪壁を越え、C3を設置し、三次にわたる登頂すべてに成功する。荷揚げの疲れを忘れさず雄大な景色や成功の鍵となった人の和がある。

名誉隊員を含めて二十五名の年齢幅のある隊員による『隊員随想』には、人や自然へのこまやかな観察や

印象などが綴られていて、多彩な隊の雰囲気伝わってくる。

県立博物館と筑波大生理学教室からの学術隊員による調査研究報告も掲載されている。(三栖寿生)

一九九六年三月 栃木県高体連登山部中国チベット学術登山隊一九九五実行委員会発行 一三八ページ 三千九十円

一九九五年秋シシャパンマ峰登山隊報告書

『シシャパンマ』

小西政継隊長は「僕にとって遠征隊のよい報告書とは、次にその山の登山をするにあたって、すべてのノウハウが詰まっていることである」と言う。そのノウハウを、小西はこの報告書の中で、ざっくばらんに披露してくれている。装備、食料についてはカトマンズで調達できるものが詳しくあげてあり、参考になる。歯に衣着せぬメンバー紹介、ルートはイラストで示されており、分かりやすい。

後半は隊員たちそれぞれの思いが綴られ、これがまたなかなか充実しており、読み物としても十分に楽しめる。(渡邊玉枝)

一九九五年二月 YMSスタートル倶楽部発行 八三ページ 非売品

図書室受入報告(1996年9月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
G. Ueda et. al. (eds.)	High-Altitude Medical Science	466pp/26cm	Shinshu Univ.	1988	購入
G. Ueda et. al. (eds.)	High-Altitude Medicine	546pp/26cm	Shinshu Univ. Press	1992	購入
Stohr & Leuchsner	Sun Rock (B.1): Klettern am Mittelmeer, Mallos bis Montanejos	199pp/19cm	Panico Alpinverlag	1992	購入
Stohr & Leuchsner	Sun Rock (B.2): Klettern am Mittelmeer, Malaga bis Mallorca	215pp/19cm	Panico Alpinverlag	1993	購入
Johanna Merz (ed.)	The Alpine Journal 1996 (Vol. 101, No. 345)	370pp/23cm	Ernest Press	1996	発行者寄贈
富山県立山博物館(編)	富山県立山博物館・特別企画展「山の道具」: 装備の変遷をたどる	47pp/30cm	富山県立山博物館	1993	発行者寄贈
富山県立山博物館(編)	富山県立山博物館・山岳文献目録1996	115pp/26cm	富山県立山博物館	1996	発行者寄贈
山岳4団体懇談会(編)	ブラブーツ突然破壊問題シンポジウム資料集(1996年4月)	111pp/32cm	山岳4団体懇談会	1996	発行者寄贈
シッキムヒマラヤ 登山実行委員会(編)	シッキムヒマラヤ学術登山報告書1995: シニオルチュエ登頂	148pp/26cm	東北大学良峻山の会	1996	発行者寄贈
田部重治	わが山旅50年(平凡社ライブラリーNo. 134)	498pp/17cm	平凡社	1996	出版社寄贈
W・ウェストン	日本アルプス再訪(平凡社ライブラリーNo. 161)	462pp/17cm	平凡社	1996	出版社寄贈
田畑真一	私のウェストン追跡記: 細部からその実像に迫る	273pp/20cm	山と溪谷社	1996	著者寄贈
小林静生	山の小屋の手帖	214pp/20cm	鹿鳴荘	1996	著者寄贈
三俣山荘撤去命令を 撤回させる会(編)	山小屋はいらないのか	214pp/19cm	リベルタ出版	1995	松沢節夫氏寄贈
加藤久晴	続・傷だらけの百名山	238pp/20cm	リベルタ出版	1996	著者寄贈
寺田政晴	乾徳山研究【新版】: 乾徳山西壁と周辺の谷	57pp/22cm	寺田政晴(私家版)	1995	著者寄贈
奥田博	宮沢賢治の山旅: イーハトーブの山を訪ねて	210pp/22cm	東京新聞出版局	1996	出版社寄贈
高田宏(著)・細川剛(写真)	ウェストンの森: 上高地・農々谷の朝と夜	136pp/22cm	日本テレビ放送網	1996	発行者寄贈
安藤忠夫(編)	東海山岳(第7号・1996)	405pp/21cm	日本山岳会東海支部	1996	発行者寄贈
日本山岳会青年部	全国大学山岳部監督会議 1995年度	68pp/22cm	日本山岳会青年部	1996	発行者寄贈
日本山岳会青年部	シルクロードの高峰に立つ	68pp/26cm	日本山岳会青年部	1996	発行者寄贈

: 日本木斯塔格阿塔(ムスターグ・アタ)山群登山隊1995報告書

会務報告

九月理事会

日時 九月十三日(木) 十八時四十分
二十時

場所 日本山岳会会議室

出席者 村木会長、中村、斎藤、宮下各副会長、大屋、吉永、中川、伊藤、水野、堀井、渡邊、溝口、山本、宇田川、熊崎、大蔵各理事、川崎、石橋各監事、小倉、村井、神崎各常任評議員

「委任」大谷、松浦、南井、田邊各理事、大倉、大森、重廣各常任評議員
議事に先立ち、K2登山隊一九九六・山本隊長、松原副隊長より登頂と全員無事帰国の挨拶があった。

【審議事項】

(一) 本会所蔵写真等の撮影許可願の件

大屋

① (株)帝国データバンク社創業百周年(一九〇〇年三月三日創業)に向けて「百年史編纂」にあたり、創業時商号「帝国興信社」で監督の役職にあった本会発起人、城数馬氏の写真掲載使用のため、同社広報課高津課長より許可願が出された。承認

② (株)文化出版社より季刊「銀花」第一〇八号(十一月二十五日発売)に掲載使用のため、本会高頭仁(兵衛

氏(第二代会長)関連書物の一部撮影許可願が出された。承認

③ (株)日本テレビ放送網より「森に誘われて(仮題)——W・ウエストンの上高地案内」(九月下旬放映予定)にウエストン夫妻と嘉門次、清蔵が一同に揃った写真一点、掲載使用のため撮影許可願が出された。承認

(二) 秩父宮ご遺贈金の件 吉永

八月二十一日、妃殿下ご遺贈金一千万円を受領、別途積立金として保管した。承認

(三) 中華民国山岳協会登山隊会計の件 吉永

七月十六日、三十八名が来日、対応に当たったが、会計は隊員参加費、チョモランマ三国登山報告書売り上げ費、参加会員参加費で賄い、完済した。承認

(四) マナスル登頂四十周年記念事業計画の件 大屋

① マナスルを中心としたトレッキング及び十月四日カトマンズでマナスル登頂四十周年記念レセプションを催し、その会場でクリシュナ・バハドール・バルマ氏に本会名誉会員章を贈る。

② 本会四十周年記念行事は、毎日新聞社の後援を得て、十二月七日年次晩餐会当日、ホテル会場で映画、講演、写真展など、一般の山岳愛好者にも広報の上参加を求め開催の予定。

(五) 自然保護全国集会の件 中村
九月七、八日、信濃支部の協力のもと小谷温泉で開催。八日は「国営あづみの公園」予定地視察後、大会宣言、要望書を採択し、日本山岳会自然保護委員会名で長野県知事及び建設省国営あづみの公園工事事務所長宛に提出した。承認

(六) 信濃支部創立五十周年記念の件 大屋

九月二十七、二十八日、上高地・西糸屋を会場に記念行事を開催、本部より村木会長、理事二名出席。承認
(七) 新入会員オリエンテーションの件 中川

平成八年度四、九月入会者の懇談会を十月二十六日に開催予定。承認

【報告事項】

● 財務担当より 吉永

八年度に入り五か月経過で会費納入率は八五・四%、未納金約一千万円については十一月末までに請求書を再送付する。会務支出中間報告書を九月末までに提出予定。

● K2登山隊一九九六の件 宇田川

九月二十七日、明治大学百周年記念会館において、登頂記念祝賀会、報告会を開催する。多数の方々の出席をお願いする。

● 関連山岳団体行事の件 神崎
・ 十月二、六日 スイス・ツーンで

国際山岳連盟(U I A A)総会開催。
・ 十一月八、十日 北京でアジア山岳連盟(U A A A)総会開催。

・ 十月二十六、十一月六日 H A T—J 青少年国際交流環境体験登山をネパール・アンナプルナ山域で開催。

【委員会報告】

● 図書委員会

① 第四回山を語る 九月十三日十八時三十分 J A C 集會室 講師・大森薫雄会員 テーマ・慈恵医大槍ヶ岳診療所の四十五年

② トリノ山岳博物館アルド・アルデイーゾイオ館長を囲む懇談会 十月十一日十八時三十分 J A C 集會室

・ 写真展「ウエストンの見た明治・大正の日本」に来日中の同写真原版所蔵の前記館長を招き懇談会開催。

● 百年史委員会

講演会 九月二十七日 J A C 集會室 講師・日本古地図学会会長師橋辰夫氏、館豊夫氏(三菱自動車相談役、館潔彦氏の孫)、曾孫の館和夫氏も出席し、スケッチ、巻き物等を持参、展示の予定 テーマ・「近代登山初期における測量技師たちの活躍と功績 館潔彦氏の活躍を中心に」

● 総務委員会

・ 十月五、六日 全国支部懇談会
・ 十月二十六日 秋季オリエンテーション
・ 本年度新入会員百四十名。
・ 十二月七日 年次晩餐会 新高輪

プリンスホテル

●集会委員会

・十月十九〜二十日 きのこ山行
山形県摩那山

●青年部

・九月十九日 海外登山報告会 恵
比寿区民会館 十九時〜 都岳連隊
・ポベータ峰 小笠原岩雄氏 立正
大隊・エベレスト峰 山崎幸二氏

・九月二十五日 青年部OB懇親会
JAC集会室 十九時〜

・九月二十七日 K2登山隊一九九
六祝賀会 明治大学百年記念会館
十八時〜

・十月五〜六日 全国支部懇談会
愛知県奥三河 東海支部主管

・十月十九〜二十日 岩登り研修会
指導、青年、学生部共催 富山県文
部省登山研修所

・十月二十四日 K2登山隊報告会
恵比寿区民会館 十九時〜

・十一月三十日 全国大学山岳部監
督会議 神戸学生青年センター 十
三時〜 懇親会十七時三十分〜

■会員異動

物故

鈴木岐侑 (三四一一) 8・7・27

桜井 宗 (一〇四三五) 8・9・3

春田俊郎 (四四八五) 8・9・17

桑原重夫 (一〇三三五) 8・9・29

改姓

新井智子 (一〇二二二) ↓須賀智子

INFORMATION



◆パソコン通信・講演会のお知らせ

データバンク研究会

資料委員会・共催

電子メールやインターネットの普
及は、山登りの世界にも大いに影響
を与えつつあります。

そこで、これから始めたい人、初
心者を含めて多くの方々にこの楽し
みを知っていただきたく「山の地図」
の人気フォーラム『FYAMAP』代
表・田代博さんを迎えての講演会を
開きます。

日時 十二月十九日(木) 十九時〜約
二時間

場所 山岳集会室

講師 田代 博氏 (コードネーム

『山尾 望』)

テーマ 電子時代の山の楽しみ パ
ソコン通信・インターネット
と山岳情報 (ビデオとスライ
ド使用)

費用 五百円 (茶菓子代)

◆八方尾根懇親スキー山行

集会委員会

恒例の懇親スキー山行は冬季オリ
ンピックの開催地、八方尾根です。
大いに腕を磨きましょう。

日時 一九九七年一月十日(金)〜十二
日(日) 二泊三日

場所 八方尾根第一ケルン・八方池
山荘に宿泊

集合 一月十日、八方池山荘に集合

*唐松岳アタックは各自で、とくに
案内はしません。

費用 一泊・一万円
二泊・二万二千元

(懇親会費、保険料を含む)

申込 十二月二十日までにハガキに
氏名、会員番号、年齢(保険
のため)、住所、電話番号を
明記の上、集委会まで。

*折り返し詳細案内を送ります。

定員 五十名

ルーム日誌

9月

2日 総務委員会

3日 自然保護委員会 アルパイン
スケッチクラブ

4日 山の自然学研究会

6日 青年部 フォトビデオクラブ

7日 集委会 二火会

9日 資料委員会 アルパインス

ケッチクラブ 図書委員会

10日 自然保護委員会 二火会 ア
ルパインスケッチクラブ 95

11日 常務理事会 ジャック93会
同期会

12日 山研委員会

13日 図書委員会 集委会

17日 総務委員会 フォトビデオ委
員会 自然保護委員会

18日 三水会

20日 科学委員会 山岳編集委員会

24日 自然保護委員会

25日 青年部 緑爽会

26日 集委会 学生会

27日 百年史委員会 9月来室者680名

■訂正

九月号一九ページ「会員異動」二
段目一行「退会」の文字が欠落して
いました。谷田川広、鈴木勲、町屋
明夫、奥園玲子の四氏は退会です。
お詫びして訂正いたします。

日本山岳会報 山 618号

1996年(平成8年)11月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

振替口座 東京3-4829

発行者 村木潤次郎

編集人 伊藤 敬

印刷 株式会社 双陽社